

Asia Medical Massage
Instructors Network

2010年8月

タイあん摩講習会

ミャンマー医療マッサージセミナー

報告書

期間：平成 22 年8月2日～11日

タイ・ミャンマーセミナー概括

筑波技術大学 AMIN 推進委員会

緒方昭広

今年度の AMIN の事業として、2010 年 8 月 2 日～8 月 11 日の 10 日間の期間中、要請のあったタイとミャンマーにおいてセミナーを開催した。AMIN ではタイの視覚障害者の職業自立のために、2010 年までに数回訪問しタイ政府および視覚障害者団体に対して日本における国家試験実施の実態やそのほかの情報提供、資料、教材、視覚障害者教育の指導助言などを提供し支援してきた。今回のタイでのセミナー（ワークショップ）は、視覚障害協会にて、8 月 3 日と 8 月 10 日の 2 日間で実施した。目的は 2011 年 4 月～5 月にタイで視覚障害者のためのタイ医療マッサージ国家試験が初めて実施される。そのため国家試験の受験資格を得るためのカリキュラムが進行している。そのカリキュラムの中に含まれている特別授業として「日本あん摩」の実技セミナー開催について当該団体よりの依頼に応えるためであった。実技セミナーは、日本から講師として 4 名で、40 名の視覚障害者の受講生に対して、日本あん摩の基本実技と臨床あん摩を実施した。受講生はある程度の医学知識もあり熱心に講師の説明と実技習得に取り組んでいた。

一方、ミャンマーにおける実技セミナーは、ジャパンハート（国際医療奉仕団）のミャンマー事務局よりセミナーの依頼があり 8 月 4 日～8 日の日程でセミナー開催とミャンマーの盲学校 2 校と視覚障害者が働いているマッサージ店を視察した。実技セミナーでは、事前の広報もあり、ミャンマー各地から約 100 名の参加者があった。中には二日間バスに乗って参加したグループもあった。実技セミナーは受講者を 4 つのグループに分け、各グループに一人の講師が指導に当たった。クーラーのない扇風機のみの中で、滴る汗を拭きながら臨床あん摩の指導を行った。日本の盲学校教育のように基礎学力や医学的知識のほとんどない受講者に対しての指導は言葉の選択から、技術指導にいたるまで大変労力と工夫が必要とされた。盲学校の視察においては、ヤンゴンの国立の盲学校で校長先生の話聞くことができた。インクルーシブ教育がされており、その教育実施に当たっては、視覚障害者を受け入れる学校や盲学校の教員の数と、その教師たちの理解と労力が必要であると実感させられた。

最後に同行いただいた 3 人の講師（喜多嶋氏、武藤氏、小仲氏）と事務局の楠山氏に深謝します。

活動報告

8月2日（バンコク1日目）

○事前打合せ① 頰肩背部および上肢のあん摩

参加：緒方、喜多嶋、武藤、小仲、楠山

場所：Centre Point Wireless Hotel

バンコク到着後すぐに、滞在ホテルにてタイでのあん摩講習1日目に向けて講師間の事前打合せを行った。今回の講習では、生徒40名を4グループに分け、それぞれ別々の部屋でそれぞれの講師が担当するため、指導内容を確認し、グループ間で大きなばらつきが出ないように確認を行った。4名の講師が実際に顔を合わせて内容について検討するのは、これが初めてということもあり、事前に作成した資料を基に、実際に実演し合う等細かい点まで確認し合った。

8月3日（バンコク2日目）

○あん摩講習会1日目

場所：視覚障害者雇用促進財団

8時半から、今回のホストであるタイ盲人連合会長のペチャラート氏との打合せを行った後、9時より講習会を開始した。まずレクチャールームに生徒・講師および関係者全員が集まり、講師の紹介や本日の講習内容概要、日本あん摩の特徴などについて簡単に説明を行い、その後4つの部屋に分かれ講習を実施した。グループ分けについては、



開会式

は、弱視者と全盲者とがペアになるよう希望したが、ほとんどが全盲者ということで、各グループに1名ずつ弱視者が振り分けられるというようなグループ分けとなった。

午前：基礎あん摩（上肢） - 肩背腰部、頰部、上肢

午後：応用あん摩（上肢） - 肩こり、頰部の痛み、肩関節の痛み等



講習の様子

生徒のレベルや、通訳の技量などもそれぞれ異なるようであった。そのため、午前中の基礎について

は打合せ通りの流れで行い、午後の応用（臨床）あん摩については、それぞれの教員の裁量によって行った。（技術的な点や感想等については各講師報告書参照）

8月4日（バンコク→ヤンゴン移動日）

○事前打合せ② 腰下肢のあん摩

参加：緒方、喜多嶋、武藤、小仲、楠山

場所：Centre Point Wireless Road

ミャンマー医療マッサージセミナーおよび2回目のタイあん摩講習のため、講師4名で事前打合せを行った。頸肩背部および上肢についての打合せと同様、事前に作成した資料を基に、全体の流れ、指導ポイント、手技の確認等を、実技も合わせて行い、講師間での理解を共有した。

○事前打合せ③ ミャンマー医療マッサージセミナーに向け

参加：緒方、喜多嶋、武藤、小仲、楠山（AMIN側出席者）

河野、西垣、塩崎、クンチャン他（ミャンマー側出席者）

場所：Summit Parkview Hotel

ホテル到着後、そのまま夕食をとりながらの打合せとなった。日程の確認、セミナーの流れ、ベッド等の配置などを確認した。

8月5日（ミャンマー2日目）

○ミャンマー視覚障害者医療マッサージセミナー

ミャンマー全国の盲学校や視覚障害者関係者約100名が参加し、ミャンマー社会福祉省およびNGO法人ジャパンハートの主催でミャンマー視覚障害者医療マッサージセミナーが開催された。ミャンマーでこのように視覚障害者関係者が一堂に会する機会は、今回が初めてということで、記念すべき日となった。場所は、社会福祉省が運営する養護学校で行われた。学校周辺は緑も多く、今年の日本に比べたら涼しく感じるが、



午後から行われた実技ワークショップでは、エアコンなどもなく、日本からの講師と通訳さんは、汗だくになりながら1名の講師に対し25名の生徒を指導した。

初日は指導対象者の多さや、配置に不慣れなせいもあり、かなり戸惑っていたが、2日目はミャンマーのスタッフのおかげで、スムーズに講習が出来た。

プログラム	
1日目	
9:00~9:30	Registration
9:30~10:00	Opening Ceremony ① Ms. Yu Yu Swe (Assistant Director, Ministry of Social Welfare, Relief and Resettlement) ② 緒方昭広教授 (筑波技術大学) ③ 塩崎真也氏 (Instructor, Myanmar Medical Massage Training Center in the Visual Impaired)
10:00~12:00	記念講演「日本の視覚障害者の現状について」 筑波技術大学教授 AMIN 推進委員 緒方昭広
12:00~13:30	昼食
13:30~15:30	あん摩実技ワークショップ①
2日目	
9:30~10:00	Registration
10:00~12:00	あん摩実技ワークショップ②
12:00~12:30	Closing Ceremony ① 喜多嶋毅 (大阪市立視覚特別支援学校 講師) ② Daw Daung Kun Chang (Instructor, Myanmar Medical Massage Training Center in the Visual Impaired) ③ U Aung Myint (Principal, Myanmar Medical Massage Training Center in the Visual Impaired)



○国立チーミンダイイン盲学校視察

対応者：モーモーウー学校長

訪問者：緒方、喜多嶋、武藤、小仲、楠山他

昼食後、ヤンゴン市内の国立盲学校を訪問し、校長先生が対応して下さいました。校長先生は女性で、もともと小学校の先生をしていたということで、先生自身も、視覚障害者の子供を養子として受け入れ、育てているとのことであった。建物の中にはミャンマーで唯一の点字ブロック（日本のODAによる支援）が設置されている。学内には、主に小学部の生徒が学ぶ教室、寄宿舎、マッサージ実習室および臨床用の部屋等があった。マッサージは1時間4000チャット（4ドル程度）。

こちらの盲学校は1914年にキリスト教神父によって設立され、その後1963年に社会福祉省の運営となった。学校の運営資金は、政府のサポートに加え、寄付によって捻出されている。生徒は200名まで収容可だが、実際は現在95名の生徒がおり、政府の支援により生徒は無料で教育を受けることが出来る。生徒の入学資格は6歳～18歳までの子供で、身内のいる者としているため、夏休みは親元へ帰省する。募集は、新聞広告や、寄付者からの紹介、地方関係者からの紹介等を通じておこなわれているようだ。地方から入学する場合は、紹介状と親も含めた面談、診断書（視力が晴眼者の1/10）が必要。ヤンゴン市内から親が送り迎えして通っている子もいる。

学校では、主に教育とマッサージ等の職業訓練が行われている。学内では主に小学生までの生徒が学んでおり、中学生以上の生徒は、晴眼者と一緒の学校で学ぶため、現在61名の生徒が提携している学校にスクールバスで通っている。晴眼者と共に学ぶということで、指導面で難しいこともあるのではないかと、との質問が出たが、①教員同士で視覚障害者に対する教育についてのワークショップを



ミャンマー唯一の点字ブロック。日本のものよりサイズは少し大きめ。



授業の様子。顔にはタナカ（日焼け止め等の効果があるらしい）が塗られている

開催する、②前もって次に行われる授業内容について盲学校教員に資料を渡してもらい、前日までに盲学校の教員がノートを点字にするなど資料を作る、③盲学校に帰ってきてから、盲学校教員が勉強のサポートを行う、等により、結果的に晴眼者の生徒より成績が良い者が多い。(数学は苦手のように)ただし、現在は市内すべての学校でこのような対応をしてくれているわけではなく、決められた学校が受入れをしてくれている。その点については、社会福祉省と文部科学省が協議を行っている。このようなインクルーシブ教育を行うメリットを聞くと、やはり、「障害者であるから出来ない」というイメージを払拭し、成績面でも優秀な視覚障害者もあり、「障害を持っていても多くの事が出来る」ということを社会的に知ってもらう機会になるという点が一番だとのこと。晴眼者の生徒も、助け合うなど協力しあっているようである。

盲学校出身で、大学に進んだものも17名おり、何名かは教員として働いてもらっている。ミャンマーで教員になるためには、大学を卒業し(学部は関係ない)採用試験に合格した者に対し、文部科学省が1年~2年の教員としてのトレーニングを行う、という仕組みのようで、合理的な方法であるような印象を受けた。大学卒業者の中には、沖縄プロジェクトに参加したソフィアさんもあり、現在は地元でマッサージ店を営んでいるとのことである。大学進学希望者は無料で進学することが出来る。

職業訓練としては、籐製品を作るコースと、マッサージコースがある。籐製品の場合は、材料を購入する必要があり、仕事をするにもお金がかかるため、マッサージのほうが技術だけでよいため自立につながりやすい。マッサージコースは2年課程で、ミャンマー伝統マッサージと日本あん摩や整体などを組み合わせて行っている。生徒は、ある程度の年齢(15歳くらいが多い)で入学してくる者に対し、点字教育を行った後職業訓練を行う。マッサージの職業訓練を終えた者は、GENKYなどの店で自立して働くことが出来ているが、まだまだそのように自立出来るようになるしくみがやっと作られてきたところ。開業している者はいない。

8月7日(土)(ミャンマー3日目)

○私立カワイジャン盲学校視察

対応者：学校長

訪問者：緒方、喜多嶋、武藤、小仲、楠山他

昨日の国立盲学校に引き続き、今回は私立の盲学校を訪問した。敷地は大変広く、施設も比較的整っており、国立盲学校に比べ規模も大きい。建物は5階建てで、その費用の半分は日本のODA（草の根資金、上限1000万円）によって賄われている。盲学校の生徒だけでなく、生徒の家族も住むような家などがあり、小さな集落となっているようであった。こちらも、女性の学校長が対応して下さった。国立盲学校といい、女性の校長先生が多いのかという質問をしたところ、盲学校の教員は賃金も低いため、女性がほとんどだという返答であった。



カワイジャン盲学校は、キリスト教協会系の盲学校であり、1975年に盲人のキリスト教神父によって開校した。この神父は高校時代に化学の実験中に失明し、その後しばらく入院していた。退院した時にはすでに19歳になっており、当時唯一あった国立の盲学校は18歳までしか入学出来ないということで、盲学校に入る事が出来なかった。そこで、19歳以上の人も入学出来るような盲学校を作りたいと考えたという。1977年から14名の生徒を受け入れ、建物はなく、他人の家を借りたり、木の下で教育を行った。1982年に、ドイツからの寄付金で土地を手に入れ、初めて竹の小屋を作り、その中で、小学校～高校までの生徒を教えていたという。

現在生徒150名（男性78名、女性72名）で、スタッフは教員32名（男性1名、女性31名）を含め112名で運営している。生徒は5歳～25歳で、26歳以上でも職業訓練を受けることが出来るため、中途失明の生徒なども入学することが出来る。職業訓練は、箒や足ふきマット、籐の椅子などの作成と、マッサージを教えている。どの職業訓練を受けるかは、ある程度学校側で、健康面や見た目などで振り分けており、マッサージの訓練生は現在40名（全員20歳以上）で、午前中点字、午後マッサージの授業を受けている。マッサージ師は附属のマッサージ院で一般の客に対しマッサージを行い、料金の6割がマッサージ師、4割が学校の運営費として使用される。運営費用は寄付金とマッサージ院の収入より捻出している。寄付金集めの方法としては、入学式および卒業式に、ミャンマーの有名人がチャリティショーを行うことで寄付集めしたり、公務員からの寄付など

もある。ミャンマー北部に、同じくキリスト教系のミッチーナ盲学校があり、そちらの建物も日本政府から援助がなされている。

○ミャンマー視覚障害者医療マッサージトレーニングセンター訪問

対応者：学校長、塩崎氏、クンチャン氏他

訪問者：緒方、喜多嶋、武藤、小仲、楠山他

昼食後、ジャパンハートが運営する、ミャンマー視覚障害者医療マッサージトレーニングセンターを訪問した。教室と寄宿舎の入った建物は、もともとどこかの大使館だったということで、かなり立派な建物であった。セミナーでもお会いした校長先生も同席して下さり、改めて概略を伺うこ



とができた。ちなみに、校長先生は元警官という経歴だそうだ。現在生徒12名（男性7名、女性5名）が、将来の指導者候補として、各盲学校代表として学びに来ている。生徒達は、1年間の教育を受けたのち、さらに1年間の臨床教育を受ける予定である。教員は、日本から塩崎氏と国際視覚障害者援護協会の留学生であったクンチャン氏の二人で担当しているが、生徒の基礎教育レベルが、小学校卒業レベルから大学卒業レベルと差があり、かなり苦労しているようであった。その他運営スタッフとして7名常駐している。同センターでは、今回 AMIN の作成した初級あん摩ガイドラインを軸にカリキュラム編成しており、教科書も AMIN のものに補足を加えるなどして教えているとのこと。教材としては、解剖模型（骨格、内臓）も用意されている。ガイドラインの使用感については、やはり1年間で、しかも教員が実質1名という現状では、すべて教えるのは難しいため、ポイントポイントを絞って教えているとのことであった。



○YUME EYE マッサージ店

対応者：スタッフ 2 名

訪問者：緒方、喜多嶋、武藤、小仲、楠山他

日本の NPO 法人ゆめ風基金の支援により作られた視覚障害者マッサージ店「Yume Eye」を訪問した。主に、カワイジャン盲学校の卒業生が働く場所ということで、料金体制もカワイジャン盲学校と同様、1 時間 3500 チャット

ト（ミャンマー人）、7000 チャット（外国人）となっていた。また、マッサージの他、手作りの手芸品なども販売している。

日本からの講師 4 名 + 塩崎氏が、それぞれマッサージを受け、手技など気がついた点について指導を行った。マッサージ技術以外に、枕カバーや、ベッドカバーは 3 日に 1 回しか換えないなど、衛生面で少し気になる点が見受けられる。スタッフは全員視覚障害者で、一部は店で生活しているということであった。



8 月 8 日（日）（ミャンマー 4 日目、ヤンゴン→バンコク移動）

○GENKY マッサージ店訪問

対応者：西垣氏、BOBO 氏

訪問者：緒方、喜多嶋、武藤、小仲、楠山他

最後に、西垣氏の経営する視覚障害者マッサージ店、GENKY を訪問した。日系企業の多く入る Sakura Tower というビル内にあり、日本のマッサージ店のように清潔感のある店であった。日本からの教員はそれぞれ 2 名ずつマッサージを受け、手技やリズムなどについての指導を行った。午前中の予約はすべて断っていたということ



であったが、飛び込みのお客さんが何名も来るなど、人気がある様子うかがえた。オフィスビル内であっても、やはり土日が込み合うようである。店内には、日本語や英語などを話すことが出来るスタッフなどもおり、外国人のお客さんも多いとのことであった。料金は 45 分 5000 チャット（フットは 4500 チャット）。コースはボディの他、フットマッサージのコースもある。

8月9日（月）（タイ3日目）

○タイ保健省伝統医療研究所

対応者：Dr. Anchalee, Ms. Benjama

訪問者：緒方、喜多嶋、武藤、楠山

バンコクに戻り、ノンタブリにあるタイ保健省伝統医療研究所へ訪問した。打合せで訪れたことはあったが、今回の目的はタイ伝統医療マッサージを受けることであった。少し早く到着したため、上階にあるタイ伝統医療の歴史を紹介する博物館も見学させていただくことが出来た。



医療マッサージ院では、まず受付を行った後、施術着に着替えた。通常、まずタイ伝統医師が問診を行い、診断した上でマッサージ師にオーダーを出すというシステムのようなのだが、我々の場合は、血圧を測り、問題がないということですぐにマッサージ師のいる場所に案内された。

マッサージそのものの感想としては、これまで様々なところでタイマッサージ（リラクゼーション目的）を受けてきたが、正直それとそれほど変わらないような印象であった。

（文責 楠山）

以下、お忙しい中、今回講師としてタイ・ミャンマーとご同行下さった先生方からの報告を掲載致します。

タイ王国・ミャンマーセミナー報告

筑波技術大学 AMIN 推進委員会

緒方昭広

○タイ日本あん摩講習（2010年8月3日、8月10日）

タイ国バンコックの視覚障害者雇用促進財団において、視覚障害者40名に日本按摩（マッサージ）の特別講義を行った。40名の生徒に対して、10名ずつのグループに班分けし、各班に日本からの講師4名を割り振った。4名の講師は緒方（筑波技術大学）、喜多嶋毅氏（大阪市立視覚特別支援学校）、武藤美樹氏（茨城県立盲学校）、小仲浩司氏（タイ国在住）が当たった。

第一日目（8月3日）は、午前9時～9時30分まで、開会式および当日一日予定を説明した。当日の内容は上半身の基礎的な日本按摩（マッサージ）と午後の上半身の遭遇しやすい症状、疾患として「肩コリ」、「胸郭出口症候群」を例に午前2コマ、午後2コマ（1コマ90分）に分けて、中に30分の休憩をはさみ実施した。通訳も各班の各講師に一人がついて逐次通訳を行った。生徒はいずれも一通りのタイマッサージをすでにマスターしており、日本のあん摩にどれだけの興味を持つか少々心配もあった。しかしほとんどの生徒が日本按摩に興味を持ち熱心に講師、通訳の話に耳を傾け多くの質問を講師に浴びせかけていた。彼らのマッサージを受けてみると一通りの筋肉に対するマッサージはできるものの、その医学的知識は不十分であり、また解剖、ことに骨や筋肉、神経の名称および走行の知識と体表観察が体得されておらず、そのことがマッサージの仕方にも表現されているように思われた。繰り返しになるが通り一辺倒のマッサージはできるものの、臨床的応用能力については、その症状の出現するメカニズムや検査法、病態把握など、それに対するマッサージ技術についてはかなりのカリキュラム上の改善が必要になるであろう。しかし彼らの向上心や熱心さがあり、環境さえ整えられれば、日本の盲学校における保健医療科レベルには近づけると考えられる。

○ミャンマー視覚障害者マッサージセミナー（8月5日～8日）

セミナーは5日～6日の二日間と7日～8日は、ミャンマーの国立盲学校、お

よびキリスト教系の盲学校、視覚障害者のマッサージ店を視察した。

セミナーは、ジャパンハートの主催で、ミャンマー全国の盲学校7～8校に呼びかけ、遠方からはバスで2日間かけてセミナーに参加した受講生並びに教員がいた。それだけにこのセミナーの意義と期待の大きさがうかがえた。日本からのマッサージの講師から学べることへの期待度は各講師が責任の大きさを背負ったような気がする。約100名が参加して行われた。半分は実際にマッサージの実技技術を修得するために集まってきた視覚障害者であり、残りは引率者や教員たちなどの関係者であった。

セミナー初日の8月5日は、午前が開会式のあいさつとしてAMINを代表して緒方（筑波技術大学）が務めた。ミャンマー福祉省の副局長も参加し、今回のセミナーがミャンマー国家、視覚障害者に大きな意義をもつことを確信する旨の挨拶がなされた。午後2時間、二日目（6日）は午前2時間で、4班に分かれて4人の各講師は通訳とともに担当した。一日目は直接マッサージをやらない付添者も参加しており、指導に手間取ったところがあった。二日目はマッサージを行っている視覚障害者のみの指導ができるよう班構成をかえてもらった。一日目の指導後に意見聴衆があり、一日目の受講者の実技講習の感想を緊急アンケートしてもらった。80%以上に今回の実技講習は多くの知識と技術を学ぶことができたことが発表された。もっと多くの技術を学びたいなどの意見もあった。実技講習の内容は二日間とも臨床的な応用で、一回目が「肩こり」「頸肩腕症候群」、「五十肩」を中心に、2回目は「腰痛」「下肢痛」「膝痛」などに対するあん摩実技を指導した。全員がほとんど医学的知識、すなわち当面マッサージやあん摩に必要な解剖学や生理学の知識が全くないと言っていいほどその知識を持っておらず、指導に難儀した場面もあった。しかし、これらの国の基礎学力をはじめとして、マッサージの教育制度など法的整備はほとんどないことの現状を認識することができたことは大きな収穫であった。翻って日本における視覚障害者の教育の歴史の長さとその教育的整備は格段に高く、多くの視覚障害者が自立していることにその幸福をかみしめる感があった。またヤンゴンの大都市に晴眼者のマッサージ店が多く存在している。マッサージは国民に風俗との結ぶつきを連想される部分もある。しかし、最近ヤンゴンの日系ビル内に設置された視覚障害者が働くマッサージ店をはじめとして、視覚障害者のマッサージは医療的マッサージとして徐々に認識されるようになってきていると聞き、大変好ましい傾向にあると感動した。

タイ・ミャンマー海外支援事業報告書

大阪市立視覚特別支援学校講師

喜多嶋毅

I タイセミナーの概要と感想

1. 実技指導内容

8月3日(火)は午前中90分を2こまで上半身の日本あん摩の基礎実技を行い、午後からの90分2こまで上半身関連の疾患の臨床実技を行った。私のところでは肩こりによる頤や肩の運動制限に対するあん摩法や肩関節周囲炎に対する施術法、頤腕症候群に対する施術法等の要望があった。そこで、頤の側屈や回旋制限に対する施術部位や肩関節の挙上制限や結帯動作制限の際の施術部位について実習を行った。また肩関節周囲炎に対しては神経生理学的なテクニックを指導した。頤腕症候群では障害部位とそれに対応する施術部位等を説明・指導した。

8月10日(火)は同じく午前中90分2コマで下半身の基礎あん摩実技を行い、午後の90分2コマで腰痛等の臨床実技を行った。腰痛では原因別に施術部位を指示するとともに、腰痛に応用できるストレッチや脚長差調整法等を指導した。

2. 感想

来年4月～5月に実施される国家試験を受験するとのことであったが、筆記等に問題ある受講生が多く、後9カ月ほどで試験に対応した筆記ができるのか心配になった。昨年の説明では、医療マッサージ師として20疾患に対するマッサージ施術を学び、国家試験を受けると聞いていたが、解剖、生理等、基礎的な学習についても充分に行われているのか、個人差の大きい生徒を見ていると心配になった。

II ミャンマーセミナーの概要と感想

1. 実技指導内容

2時間を2クール使い、1クール目は上半身に関する臨床実技を、2クール目は腰痛を含む下半身に関する臨床実技を行った。タイでもそうだが、ミャンマーでも国内で行われているマッサージはどちらかと言うと下半身に重点を置いたものなので、上半身についてはいろいろ質問があるのではないかと思い、尋ねたが、ほとんどなかった。しかし、下半身、腰痛等に対しては関心も深く、日本あん摩の施術法だけでなく、運動法やストレッチ等にも多大の関心を示していた。

2. 感想

ミャンマーは強刺激のマッサージを好むということで、私が国立の盲学校でマッサージを指導している先生やキリスト教系の盲学校でマッサージを指導している先生の施術を受けたところ、確かにひねり技等けっこう強刺激の手技がよく用いられていた。また、日本人に以前あん摩を習ったということもあり、カンボジアやベトナムの視覚障害者とは異なり、けっこう筋肉の走行にそって手技が行われていた。ただ、両者とも指の力は充分にあるが、圧迫法や早いリズムの把握法が主体で、揉捏法はほとんど行われなかった。しかも下半身が主で、下腿前側や足底等には肘もみが、また大腿後側には両膝を使つての圧迫が行われた他、ひねり技等タイ式マッサージや整体、中国の推拿等も取り入れていることには驚かされた。特に大腿前面の四頭筋や外側の腸脛靭帯等ほどの位置でもよく手掌等で圧迫されたので、施術後、痛さが残るほどであった。

このような強刺激を好む国情の中で、日本の医療あん摩をどのように植えつけるか、特に揉捏法で筋肉をほぐすことについてどのように指導すればいいのか迷いを感じた。しかし、このような強刺激をどの年齢の患者も受けるわけではないだろうし、また病態によっては弱刺激にしなければならないこともあるであろう。ミャンマーの視覚障害者のマッサージ訓練を受けている人々の学力差は大きく、解剖、生理等の基礎医学の知識も乏しい人が多いので、少しずつ年月をかけながら浸透させていくことが大切かと思われた。

タイ王国、ミャンマー共和国視覚障害者 医療マッサージセミナーに参加して

茨城県立盲学校
教諭 武藤実樹

8月2日（月）バンコク到着後、明日行う講習会の内容を検討した。日本で作成した基礎実習の体幹・上肢編について、JICA 派遣の小仲先生も加わり、ひとつひとつ検討した。起立筋については腸骨稜まで行うこと、午後の臨床按摩については、肩こりが起こるメカニズムを簡単に説明した後、症状別治療法を行うこととした。

3日（火）タイ国第1回目講習会 講師ひとり10人の受け持ちで、午前には体幹・上肢の基本術式を一人一人に丁寧に指導した。日本の手ぬぐい使用は初めてのこともあり、手ぬぐいさばきは、かなり戸惑っていた様子であった。またタイ式マッサージを行っている先生方なので、押圧手技が多いと思われるので、軽擦、拇指揉捏操作はどうしても指節関節を曲げがちであった。最も、初日一日目であるので日本按摩の基本手技が、ぎこちないのは当然である。午後の症状別治療法では上項線を母指で揉まれることは初めてのようで、少しの力度で痛がっていたが、施術後は「さっぱりした感じを持った」という生徒が多かった。

4日（水）午前 第2回目タイ国講習会で使用する、腰・下肢編の日本で作成した基本術式と応用編の検討を、昨日同様のメンバーでひとつひとつ検討した。午後、ミャンマーに向けて移動、飛行機が雷雨のため、出発時間が遅れ、首都ヤンゴンのホテルに午後9時過ぎに到着した。

5日（木）障害児学校で午前には開会式、記念講演（日本における視覚障害者が行う按摩について）、午後は肩こり、頸肩腕症候群の臨床マッサージを指導した。ミャンマー全国から応募があったこともあり、参加人数が多く、講師一人の担当生徒数が25人であったこともあり、指導により多くの時間を必要とした。

6日（金）午前、腰痛、下肢に対する臨床マッサージを指導した。筋・骨格について、はじめて説明を受ける方もいて、受講者の知識のレベルの差が見受けられた。午後、国立チャーミング盲学校視察でクラス授業を見学させていただきました。少人数の丁寧な授業が行われている様子であった。次にマッサージ実習室と外来治療室を見せていただいた。外来治療室では、多くの一般患者さんが治療に

来られているとのことでした。講師全員、訓練生徒さんと担当教諭より、1時間近く施術を受けた。私の担当生徒さんはタイ式マッサージを主体として、その他、操体操的なおもものなども取り入れた、多彩な手技を用いていた。力度は初め強かったのですが、「弱く」と言うと、力度の調節をとてもうまく調節してくれた。終了後生徒さんに、「この技量を持ってすれば、日本では十分開業してやってゆけます」と伝えた。

7日（土）午前、私立カワイジャン盲学校視察。1975年設立で77年より生徒さんの受け入れを行い、様々な職業訓練を行っている。設立にあつたては、一人の事故による盲人の思いが学校設立へとつなげたことの説明を伺い、とても感銘を受けました。午後、昨年サイクロン台風で被害を受けた後、日本の国際視覚障害者支援団体からの寄付金で小さなビルのひとフロアを借り、マッサージ店を営んでいる夢・愛治療院を訪問視察。治療院の先生方は、全員女性で午前訪問した私立カワイジャン盲学校の卒業生であった。講師全員で治療院の先生の施術を数分ずつ受けて、それぞれの方にアドバイスをを行った。施術レベルは、午前中に訪問したカワイジャン盲学校運営のマッサージ師のレベルには達していない感じで、指導的役割ができる人的配置の必要があると思われた。

次にミャンマー・マッサージトレーニングセンターを視察。この施設は2010年5月にミャンマー社会福祉省とジャパンハートの協力で視覚障害者の医療マッサージ自立支援実現のために設立された。建物は非常に立派で、元大使館であったこともあり、各部屋、全てではないが、エアコンが整備されていた。全国の盲学校より12名が選ばれ、2年課程でカリキュラムが組まれていて、解剖、生理、臨床医学、病理、衛生などを基礎からしっかり学べるようになっている。教室には骨模型、内臓模型も整備されている。日本から理療科教員養成施設卒業後、盲学校勤務を経た日本人の先生とミャンマーからの日本への盲学校留学卒業生である女性の先生が、ペアーを組んでこれらの教科を教えていました。カリキュラムの骨格は日本のAMIN（アジア太平洋医療マッサージ指導者ネットワーク）が2年前に作成したものを使用していました。

8日（日曜）午前、GENKEY治療院視察。場所は首都ヤンゴン市内でも一等地のビルにテナントとして入居している。ANA、日立など日本の有数の会社も入っているビルであった。ミャンマーで初めて、国の認可を受けて運営されている治療院である。土曜、日曜日でも営業日で、当日は日曜日であるが、営業開始の9時をまわると、常連のお客様が次々と入店されてきて、まだ1年も経過していな

いお店であるが、すでに多くの利用者から支持されている様子がわかりました。従業員全員を講師 3 人で施術を受け、その内容について一人一人にアドバイスをを行いました。午後、タイ国に移動、夜 11 時過ぎにホテル到着。

9 日（月）タイ伝統医療研究所を視察。付属施設のタイ伝統医療の歴史博物館を見学し、タイ王国の 12 世紀からの伝統医療の歴史を王朝時代別に分け、それぞれの年代における伝統医療における成果等を解説していただき、タイ式マッサージが長い歴史を通して、組み立てられたことの理解を深められました。

10（火）1 日 タイ国における第 2 回目セミナー実施。午前は腰部、下肢の基本施術指導を行う。午後 臨床按摩で腰痛、膝の痛み、を取り上げ、理学的検査法、関連筋肉・骨の触擦法、腰部・下肢の疾患別臨床実技法を指導しました。私の班の参加者の数人は、実際に検査をしてゆくと、これらの疾患のあることがわかり、症状を自ら訴えてくる方も数人いて、その方を被検者として、改めて全員の方に検査法をやってもらおうと、ずいぶんと納得した様子が伺えました。

タイ、ミャンマー国における日本の医療マッサージセミナーに参加できましたことで、改めて初心者によく学んでいただくには、どの様な指導法がよいのかなど、様々なことを学ばせていただきました。また、日本の盲学校理療科は過去 20 年以上に渡り、全世界より盲学生を受け入れてきました。その成果については様々なものがあると思います。別の視点から、卒業生の多くの方たちが本国に帰りましたが、本国の盲学校等に戻り、後輩の指導にあたっている方たちは少ないのではないかと、タイの講習会が終わった後に思いました。これには様々な問題が関係していると思います。タイでは来年度、盲人マッサージ師がはじめて医療マッサージ国家試験受験を控えた様子を見て、この分野の歴史的変遷を見るおもいでした。ミャンマーでは、これから大いに盲人の医療マッサージが発展していくように、力強い息吹を感じました。

タイ・ミャンマーセミナーに参加して

タイ国社会開発人間安全保障省 地域福祉局職員

小仲 浩司

2010年8月2日（月曜日）

今日から8月10日まで、AMINの「タイ、ミャンマー視覚障害者医療マッサージセミナー」の講師として参加する。

午後15時30分に筑波技術大学から4名の先生方が、ここタイのスワンナプーム国際空港にお来しになる日である。正しくは3名の先生と1名の女性事務の方である。緒方先生、喜多嶋先生、武藤先生、楠山さんの4名である。17時30分に打ち合わせのためにタノンウィッタユにあるセンターポイントホテルに行く。そこで4人の先生方と明日からのマッサージセミナーのこと、実技講習の行い方などを打ち合わせする。終わったのは19時30分過ぎであった。

2010年8月3日（火曜日）

朝7時50分にセンターポイントホテルで待ち合わせし、それからタクシーでタイ国視覚障害者雇用促進協会に行く。そこで日本のマッサージや指圧あんまの手技療法をタイの視覚障害者に教えるのである。講師は4名で生徒は40名の想定である。つまり、講師1人につき生徒10名の担当である。今日は上半身の手技と治療を教える。肩部、背部、上肢の手技を行う。日本あんまと指圧で教えた。マッサージは滑剤を使いながら直接皮膚に触る為、タイではなじまないと思い教えないようにした。通訳にはカンチット君が付いてくれた。彼は緒方先生の教え子であり筑波大学を卒業した秀才である。9時から始まり、90分が1コマの授業を行った。

1コマ目は背部の手技を教えた、背部1線を正確に揉捏できる事を目的に行った。生徒には解剖的知識が全く無いという前提で第7頸椎直側から第2仙骨孔までを正確にたどれるように教えた。10人で5台のベッドを使い、施術者と患者に別れて実技実習を行った。一通り終われば施術者と患者を交代して同じ練習をする。気持ちよかったのか寝ている人もいた。

2コマ目は左側臥位で上肢の手技を教えた。肩と上腕に在る大きな筋を、正確に揉捏もしくは把握できるように教えた。肩と上腕と分けて、それぞれの筋についてイメージや確認をしなくてはならず、かなり手間取った。

昼食後3コマ目はそのまま上腕の続きである。早いペアや、遅いペアが出来てきた。全体の進み具合がばらばらになってきた。早いところは何回も繰り返して、おさらいをしておいてもらう。

4コマ目は前腕と手部に入る。かなり強引な進みであるがノートを録る人や体で一生懸命覚える人など、みんな一生懸命に理解し覚えようとしている。私も教えられる限りのものを教え、伝えてゆく覚悟である。各ペアにより進みに差があったがみんな一通り終わる。

5コマ目は施術者と患者役を交代して先ほどと同じ前腕と手部の練習を行う。みんな疲れが出てきている。通訳のカンチット君も大変である。私の説明と生徒の質問、そしてその答えを訳さなければならず、彼もかなり疲れていた。何とか17時に手部の手技まで終わる。みんな真剣に聞いてくれた。こっちも出し切った感があった。

講座終了後、先生方と食事を済ませる。ホテルに行き、明日からのミャンマー行きを打ち合わせてから帰宅する。

2010年8月4日（水曜日）

今日はスワンナプーム空港16時50分発の飛行機に乗って、ミャンマーに行った。到着は現地時間17時35分ころになった。30分の時差があるので約1時間15分乗っていたことになる。空港にはジャパンハートの河野（こうの）さんが迎えに来てくださっていた。そして、通訳や案内を担当してくださる現地法人の西垣社長も一緒だった。その足でホテルに行く。私のホテルは急に変更になったらしく、聞いていたホテルとは違った。19時30分にAMINの先生方と落ち合い、夕食兼明日の打ち合わせをする。部屋の窓からはシュエダゴンパゴダがきれいに見えた。しかし室内は薄暗くエアコンの取り付け口からねずみが出没し、あまり清潔ではなかった。

2010年8月5日（木曜日）

朝6時に置き朝食を食べた。8時30分にはジャパンハートの河野さんと西垣さんが車で迎えに来てくださった。それに乗り、他の先生方のホテルに行く。先生方をピックアップしてからミャンマー国立社会福祉省福祉地区に行く。そこにはミャンマー全土から有志が集まった約100名の視覚障害者が待っていていました。日本の按摩、マッサージ、指圧の手技を学ぶ為である。午前中は緒方

先生の挨拶と基調講演である。午後からは私たち講師4名が4部屋に分かれて実技指導に入った。1コマ120分で各部屋に実技ベッドが1台あり、生徒は25名である。通訳の方が付いてくださった。男性で名前はチョーゾーウンさんである。非常に上手な日本語を話される方で日本で何年か働いた経験のある方です。授業は生徒2人でペアになってもらいます。伏臥位の項部と肩上部および背部の手技を教えました。事前に「全盲同志のペアは避けてください」と言っているため、晴盲バランス（全盲者と弱視者のペア）が取れていました。結果、ペアの動きは早かったです。そのまま休み時間をとらずに3コマ目に突入です。15時30分になりジャパンハートの方が終了を知らせに来てくださいました。汗をたくさんかきました。心地よい疲労感が残りました。通訳の方は専門用語が多く大変に苦労されたと思います。講習後には講師やジャパンハートの河野さんなどを交え、今日の講習についてフィードバックを行いました。

2010年8月6日（金曜日）

今日は朝6時起きです。朝食を済ませ、8時30分にジャパンハートの河野さんが迎えに来てくださいました。そのまま車に乗り込み、4名の先生方をホテルでピックアップした後、昨日と同じミャンマー国立社会福祉省福祉地区に向かいました。

昨日行った打ち合わせで、①今日は通訳の人を一部交代する。②私（小仲）の担当部屋はベッドを置かずに床をきれいに拭き、伏臥位と側臥位で練習することとなりました。当然、今日、私の担当教室にはベッドが在りません。授業が始まる前、生徒さん全員に「床はきれいに拭いてあり、上にビニールシートが引いてあります。このシートもきれいに拭いてありますので、今日は床に直に伏せて練習します。」と説明しました。生徒は全員納得してくれました。

今日は腰部と下肢全体の手技。および下肢の疾患に対する手技治療の授業を行いました。まずは、第2腰椎と第4腰椎の探し方を説明します。晴盲バランスは大体取れていて、弱視者が全盲者に説明をしてくれています。滑り出しは上々です。続いて腰部の取穴方法を説明します。昨日に引き続き通訳のチョーゾーウンさんがミャンマー語で上手に説明してくれます。彼の手つきや口ぶりから私が察するに、彼が「ここは重要だ」と判断したところは、ゆっくりと繰り返し生徒に説明してくれている。それが的を得ていて、彼の理解力の高さには驚く。生徒からは「もう二度と聞けない。すべて理解し、覚えたい」という気迫が感じられ

ます。それに対してこちらも必死です。「持てるものすべて、教えられることすべてを出し切って終わりたい」という気迫のぶつかり合いとなりました。将に、一期一会です。

12 時を過ぎても質問が多数出てきます。出来る限り、一つ一つ丁寧に教えてあげたい。そうこうしている内に「終了してください」と伝令が来ました。これで本当におしまい。興奮のうちに一人一人とお別れの挨拶をして、最後に立派な通訳をしてくださったチョゾーウンさんに感謝の握手をしました。車に乗りミャンマー国立福祉地区を後にします。その後、国立ヤンゴン盲学校の訪問と視察に出かけました。

20 分ほど車に乗るとミャンマー国立ヤンゴン盲学校に到着しました。ここは 1914 年にキリスト教の布教の一環で設立され、後に国立として接收された学校です。校長先生の講和を聞いた後、学校を見学しました。小学校の授業風景を見学させていただきました。英語の先生が自分の赤ちゃんを胸に抱き、授乳させながら授業を行っているのを見ました。力強い縄文土器のように、教育の原形を見せ付けられた思いがしました。

2010 年 8 月 7 日 (土曜日)

朝 6 時に起き朝食をとったあと、8 時 30 分に河野さんが車で迎えに来てくれました。その後 4 名の先生方をピックアップしてダンクンチャンさんが卒業した私立カワイジャン盲学校の見学に出かけました。カワイジャン盲学校の敷地周辺に、生徒の寮や職員さんの家、飲食店やお店があり、さながらカワイジャン盲学校村の様でした。その後、一般の患者さんに治療している実習治療室でマッサージを受ける機会がありました。「誰から習いましたか」と訊くと「日本人から」と言う答えが返ってきました。われわれの手技療法とはかなり異なりました。ちょうど一昔前、日本でカイロがはやりだした頃のカイロのようで、危険な手技も多く見られました。教えた日本人が悪かったと思います。その後、もう一軒のマッサージ店、「ゆめあい」という所の視察にも行きました。ここはカワイジャン盲学校の卒業生が、盲学校の援助で運営しているマッサージショップです。やや衛生的に問題があると思いました。枕と顔にかけるタオルがかなり汚く、臭っていました。直接顔や頭に触れるので痒くなってきそうでした。何人もの患者を施術したままで洗っていないようです。ここの手技も教えた日本人に問題があり、技術的に荒いと感じました。衛生面と技術面とで再研修したほうが良いと思いました。

2010年8月8日（日曜日）

朝8時半より西垣さんの経営する「GENKI」マッサージ店に見学に行きました。ヤンゴン市内の中心部「サクラタワービル」の中にあります。ここはミャンマーに進出している日本企業が多く入っているビルで、ジャイカミャンマー事務所もこのビルに入っています。ミャンマーの超高層高級ビルです。各先生方が1名ないし2名のマッサージャーから施術を受け、気付いた所をアドバイスしました。

昼食を摂ってから、4人の先生方はタイへ戻るために空港へ出発です。空港まで見送りました。

2010年8月10日（火曜日）

昨日ミャンマーから帰ってきて、今朝8時にセンターポイントホテルで待ち合わせです。少々きつかったが、先生方も同じに辛かったらしく朝の顔がやつれていました。楠山さんはダウンしたらしい。お大事にしてください。4人の先生方とともにタイ国盲人雇用促進財団に行きました。

そこで午前は腰から下肢の施術手技（私は筋筋膜性腰痛と坐骨神経痛を想定した手技治療）を教えました。先週に引き続き、受け持つ生徒は同じですが、通訳者が変わりました。カンチット君からキティポン君へです。キティポン君はよく通訳を休み、勝手におしゃべりを始めます。生徒さんから「通訳お願いします」と呼ばれてはっと気が付き、こっちに戻ってくるのがしばしばありました。いちいちイラついて注意しても、マイペンライです。あきらめてこっちが出来る限り飛び回ることになりました。伏臥位と側臥位で練習をしました。午前中はあっという間に済み、午後はみんなからの治療に関する質問時間としました。いろいろ出ましたが、①四頭筋の減弱による膝の痛みの緩和治療、②不眠症のマッサージ治療、③肩甲骨内縁から肩髁と肩貞にかけて痛みのある五十肩、④肩上部と項部のこり。の4症状を選び、これらの手技治療法を教えることにしました。

4つの疾患なので、一つ一つを丁寧に教えました。あっという間に午後17時30分になってしまいました。閉会式の後、生徒さん、職員さん全員に挨拶をしてタイ国盲人雇用促進財団を後にしました。

私も含めて先生方全員が体の疲れを訴えています。「夕食は要らない」「早くホテルで休みたい」ということで夕食は摂らずにホテルのそばのコンビニで菓子パ

ンや 100%ジュースを買って部屋に戻りました。明日は朝 8 時の飛行機に乗るために暗いうちから出発しなければなりません。今までの感謝を先生方みんなにしてホテルを後にしました。22時30分自宅に帰り着く。疲れとともに大きな使命感と充足感でいっぱいでした。

以上